

週日の説教

金 大烈 神父 2010年1月19日(火)

《発想の転換》

今日の福音(マルコ2・23 28)には、イエス様と弟子たちが一緒にいた3年間、どのくらい不安定な生活をしてきたかがよく表れていると思います。たぶん、のんびりと食事をする場所も、時間も、食べる物もないような忙しい時間を過ごしたのだと思います。

ヨーロッパのあるところに権力のある領主がいました。彼は、権力があるだけでなく、人格も立派でとても評判がよかったそうです。ある年の降誕祭の前日、その領主は物乞いの姿をして、自分が治めている村々を回りました。そして、それぞれの家の扉を叩き、「食べるものがないのですが、助けてください。」と頼みました。門前払いをした家もあるし、捨てるような物を投げ与える家もありました。また、心をこめて、「これを召し上がってください」と言いながら食べ物を出す家もありました。

その翌朝、領主は「晩餐会を開くので集まって欲しい」と村人全員を招きました。降誕祭ですから、招かれた人々はみんな「ご馳走をいただけるのだらう」と期待をしながら、領主のところへ行きました。晩餐会の会場に入ってみると、それぞれの席に名前が書いてあり、席が決められていました。座ってみると、ある席には空の皿だけが、ある席には腐った料理が、ある席には立派なご馳走が置かれていました。「どういうことか」と考えていると領主が来て、「私が皆様の家を訪ねた時に皆様がしてくださったのと同じことを私も皆様にお返しします。」と言いました。ところで中には、金で作られたお皿にご馳走が置かれている人もいました。人々はその人に注目し、「あの人はどのような接待をしたので、このように立派なご馳走を置かれたのだらうか。」と考えました。実際にはその人は、その村で一番貧しい人だったそうです。しかし、領主が物乞いの姿で訪れたとき、自分が食べるためのたった一つのじゃがいもを全部、「私は大丈夫だから、あなたがお腹を満たしてください。」と言ってあげたのだそうです。領主はその姿に感動し、「世の中には、このような心が何よりも必要なのではではないか」とみんなに教えるために、わざわざこのような晩餐会を準備したのだそうです。

これは誰かが作った昔話ですが、今の時代の私たちにも考えさせる物語だと思います。

今日の福音では、お腹をすかせたイエス様の弟子たちが、麦畑を通りながら穂をとって食べ、それを見たファリサイ派の人々が責めていますね。「安息日にはしてはいけないことを、なぜあなたの弟子たちはするのでしょうか。」と。麦の穂を摘んで口に入れるのも、一つの収穫の行為であると彼らは見たわけです。しかし、ファリサイ派の人々は、イエス様の弟子たちが麦の穂をとって食べることで、嫌な気持ちになったわけではありません。彼らは、表面的には「してはいけないことをしている」と言っています。しかし実は、イエスという人物が棘のように自分の目に入ってくるのです。「これをとりのぞきたい。倒してしまいたい。」そういう気持ちで、言葉尻や行為を見て、このような言い方をしたのだと思います。

結局、このような憎しみによって、イエス様は十字架にはりつけられます。それは、憎しみから生じたことなのです。では、その憎しみはどこから生じたのでしょうか。ファリサイ派の人々や律法学

者達の「自分の立場がなくなってしまう。自分が今までやってきたこと、信じてきたことが全てくずれてしまう。それによって今まで持っていた権利を全て諦めなければならない。」という恐れから生じたのです。

考え方の転換が必要だと思います。「この弟子たちは、どのくらいお腹をすかせていたのか。」「だから麦の穂のような物でお腹を満たそうとしたのではないか。」それを哀れみの心で見ることができれば、安息日に従うという律法さえ越えられたのではないかと思います。そして、先ほどたとえとして話した領主の物語も、私たちに考え方の転換を求めているのではないかと思います。

もう一つ、面白い話をしましょう。イギリスにオックスフォードという町があります。フランスのパリのように、イギリスのファッションで有名な町です。そこに、とても優れた技を持つ裁縫師が3人いました。同じ村の中ですから、3人の競争はとても激しいものでした。あるとき、どのような名前で看板を出すか、3人が同時に考えました。

一人は、「ロンドンで一番上手な店」という看板を掲げ、するとたくさんの人がやって来ました。別の一人は、「イギリスで一番上手な店」という看板を掲げ、そこにもたくさんの人が入るようになります。二人のやり方を見たもう一人は、「私はどのような看板を出せばよいか」と、とても悩みました。

皆様ならば、どのような看板にしますか。最初はロンドン、次はイギリスですね。“三番目は世界一”これが一般的な考え方だと思います。しかしこの人は、学校から帰ってきた息子に「お父さん、一番上手であることを表す看板は、『この町で一番上手な店』ですよ。」と言われます。「『ロンドンで一番上手』、『イギリスで一番上手』な二人がいる町の中で、その二人より更に上手である」というわけです。

この話は、オックスフォードに限った話ではありません。多くの人々は、「世界で一番」とか、「ヨーロッパで一番」と考えたと思います。「あの人はロンドンで一番上手」、「あの人はイギリスで一番上手」、「それならば、私は世界で一番上手」というように考えるのが私たちの常識的な考え方です。しかし彼が選んだのは、『この町で一番上手な店』でした。私たちも、このように発想を変えて考えてみたら、もっと余裕のある生き方ができるのではないかと、この福音をとおして考えてみました。

ありがとうございました。